

記憶消去に関する

質B
たんR
たC

東京農業大が機能発見

東京農業大学の喜田聡 外傷後ストレス障害（PTSD）の原因に関係する際に脳内の特定の場所とみられ、治療法開発で遺伝子の働きを促すための応用を目指す。たんはく質の機能を突き止めた。恐怖体験の後に記憶がいつまでも残る心的状態となり、再び不安な状態にならない場合は徐々に記憶が消えていく。もう一度不安な状態になることを記憶の固定化と呼ぶ。ただ、これまで脳神経細胞での遺伝子の働きは分かっていたいなかった。

喜田教授らは、記憶が消える場合と再固定化される場合での、遺伝子の働きをマウスを利用して調べた。記憶が消える場合は、記憶形成と関連があるといわれる遺伝子の働きを促すCREBというたんぱく質が、脳の扁桃（へんと）体と前頭前野と呼ばれる部分で働いていた。記憶が再固定される場合は同じものが海馬と扁桃体で働いていた。PTSDはこのCREBがうまく働かず記憶が消えないで残るため起きる可能性があり、扁桃体と前頭前野での働きを制御することで恐怖記憶だけを消すといった新たな治療法につながる。